

「中近東・アジアの古代建築・庭園・都市環境に見る 尺度構成理念に関する調査研究」

研究年度・期間：平成 10 年度

平成 10 年度

研究代表者：藤本 康雄

(建築学科 教授)

研究ディレクター：藤本 康雄

(建築学科 教授)

共同研究者：田端 修

(建築学科 教授)

樋口 文彦

(建築学科 教授)

研究報告

研究経過の概要

西洋中世の新都市と古代ギリシア・ローマの植民都市について、295^m/₁₀₀前後のローマ尺もしくはイオニア尺による大単位モジュール格子が、それらの平面構成に見られるという事象を、今回はさらに地域を小アジアから中近東そしてアジアに拡げ、中世・古代を問わず都市・建築の様式も限らずに、いわば殆ど無作為に相当と思える資料によって、ローマ尺相当尺の使用を検討することにした。その詳細については、大阪芸術大学紀要「藝術 22, 1999」に発表済みであるが、以下にその要点を抄録して成果報告とする。

1. 古代東方

・古代ギリシア：エピダウロスの劇場

古代ギリシアのエピダウロスの劇場は紀元前 350 年頃の設計で、円形のオルケストラ中心点に 20 ローマ（イオニア）尺格子を合わせると、各部が見事な照応を見せる。オルケストラ内円直径が 70 尺、外円直径が 90 尺、中段通路までのテアトロン下段半円半径が 130 尺、同上段外縁半円半径が 200 尺、スケネ東西幅 90 尺、奥行 20 尺、東西入口間 160 尺等々である。

・アッシリア：サルゴン II 世のホルサバド城市と宮殿

アッシリアのホルサバドはサルゴン II 世（前 721-704）によって築かれた城塞都市で、東西・南北それぞれの市壁長は 5500 尺、6000 尺、5800 尺、6000 尺と見られ、内城は南壁が 900 尺、北壁が 1000 尺、東壁が 2200 尺などに見込まれる。サルゴン II 世の宮殿では、第 1 の中庭が長方形平面で大きさは間口 100m、奥行 87m で実に 340 尺と 295 尺であって、カロリング尺とローマ尺の比に等しく、長辺で正三角形が内接する神秘的な形をなす。第 2 の中庭は正三角形 2 連の図形が含まれる。ジグラットは 141 尺角となり、100 尺に対し $\sqrt{2}$ 倍の長さになり、ローマ矩尺の

応用が想像される（図1）。

◦ ペルシア：ペルセポリス

ペルセポリスはダリウス王が前520年頃築いた。およそ1600尺×950尺の基壇上に建つ。謁見の間アパダナは内法200尺×200尺、その西壁内面線の延長上に、120尺×120尺のクセルクセス門の外壁が来る。クセルクセスの広間が100尺×100尺と見える。百柱の間は東西が240尺、南北も240尺である。

2. 小アジア

◦ パルチア王朝・ササン王朝：ハトラとフィルザバード

前3世紀半ばのイラン高原北部パルチア王朝の代表的遺跡ハトラはほぼ円形をなす。中央部に聖域があり、その東部分はちょうど1000ローマ尺四方、西部分はその半分で1000尺×500尺である。東部分方形の南西隅を中心に半径3000尺の円を描くと市の全域がこれに納まり、同じ中心で半径4500尺の円を描くと、外城壁の位置がこれに近くなる（図2）。

◦ シリア：パルミラ

シリアのパルミラ遺跡の中心に四面門が立ち、東西に列柱道路が伸びる。東へ1000ローマ尺のところに記念門。門から800尺のところに、ベール神殿の3連入口部分が来る。四面門の西2000尺のところに城壁跡の一部が来る。各遺構の位置関係を格子構成をもとに整理することで、パルミラの都市計画とその推移を明らかにする手掛かりが得られるかも知れない。

◦ ダマスクス：大モスク

シリアに進攻したイスラムは、ダマスクスにあった洗礼者ヨハネの教会堂を解体し、モスクに転用した。全体構成は旧のままで、東西500尺南北340尺、新しいモスクの南北幅は140尺等、ローマ尺格子構成の踏襲は明らかである。

◦ バクダート：円形都市

762年に築かれたバクダートの円形都市の復元では、円形プランが選ばれ直径がローマ尺で約9000尺となる。2重の円形街区を連ね、その内側に直径5300尺の円形広場がある（図3）。

◦ バビロン：ウハイデル宮殿

バビロンのウハイデルの宮殿は、560尺×600尺という広大な外構壁に囲まれ、内城壁も260尺×360尺の大きさを100尺×120尺の中庭を持つ。

3. インド・ネパール地方諸時代諸建築

◦ モヘンジョ・ダロ

紀元前2500年から前1500年にかけて栄えたインダス文明遺跡として、パキスタンのモヘンジョ・ダロとハラッパーが知られる。その都市域は長方形だったとされ、東西約3600尺、南北約4000尺と見られる。中庭と覚しい部分を囲んで住宅の多くが、100尺四方の部分を含んで成り立つ。

◦ アグラのダージ・マハル

北インドにアグラのダージ・マハルはその景観美で知られるが、1632年から54年にかけて建てられた大庭園墓廟である。前庭・中央庭園・墓廟の3部分からなり、順に1000尺×500尺、1000尺×1000尺、1000尺×350尺の大きさである（図4）。

・タンジャーヴール：ブリハディーシュワラー寺

インド南端タンジャーヴールで、1003年から1009年にかけて建てられたブリハディーシュワラー寺はシヴァ神を祀る（図5）。四周は814尺×406尺と算定でき、2：1長方形をなす。中央大祠堂の神室（30尺×30尺）の中心を起点とし、西へ200尺で壁内小室中心、東へ600尺で東門中心が来る。本祠堂基壇は実に100尺×100尺、起点から400尺のところの巨大牡牛像を祀るナンディー堂がある。その他各部にローマ尺相当の適合が見られる。

4. 中国・日本の都城と結論

中国陝西省西安にあった隋・唐の長安城（581, 618～）は東西がほぼ33000尺、南北はほぼ30000尺の外郭をなすと見られる。東西道路は2000尺間隔に、南北道路は中央道路両側街区画が2000尺、皇城域の両側を通る道路の間隔は10000尺だったと見られる。同じく隋・唐の洛陽城（605）では、東西25000尺、南北24000尺と見られ、南北道路は2000尺間隔、東西道路は北部では2000尺間隔である。皇城域は10000尺×9000尺の一画を占める（図6）。

以上の事例のすべてにわたって、ローマ尺相当尺による完数モジュールによる格子構成が見られた。これは単なる偶然か、あるいは人体尺の当然の結果と見るべきか、いずれにせよ以上のような尺度比較を試みたのはわれわれが最初である。

一般識者はルネサンス以来の比例美論に慣れ過ぎて、建築・都市における実尺の問題を職人業として軽んじて来たきらいがある。そして都市・建築平面解析は、これまで機能的・形象的に留まっていた。また、商取引・課税本位に偏して地域差を当然とし、建築尺度の共用性を忘れて来たのではあるまいか。メートル法の強制に伴う資料の精度について問題はあろう。建築遺構の複雑に摩耗した石組み類の採寸誤差もある。図化に際して微妙に歪みのある実測図を適当に整え、まるめて製図することは十分考えられる。しかしそこでも概ね1/100を越える寸法誤差はないとしてよいであろう。資料は一種の概念図というべきで、それだけにローマ尺の完数による部分照応という事実が認識されてよい。

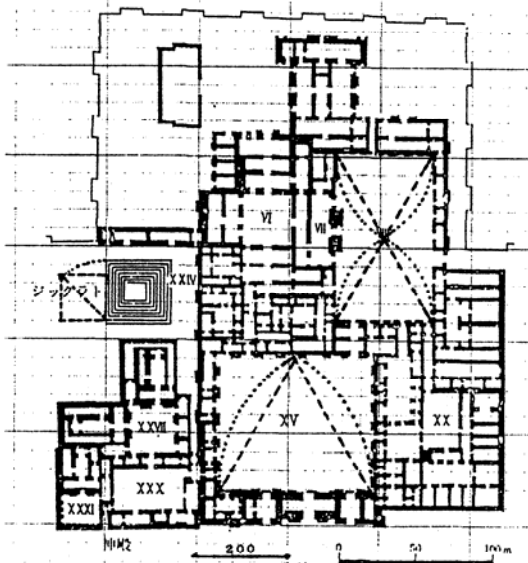


図1. サルゴンⅡ世の宮殿

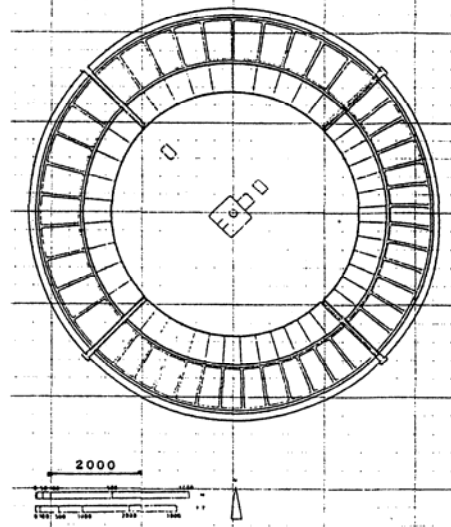


図3. バクダード：「円形都市」復原図

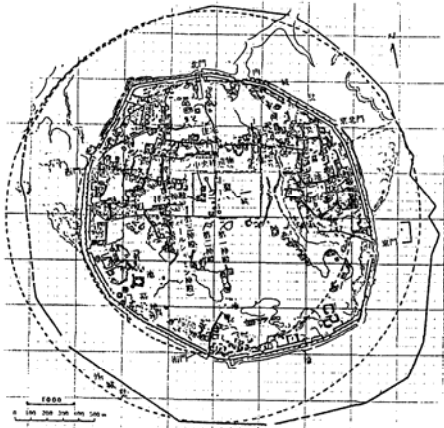


図2. バルチア王朝：ハトラ

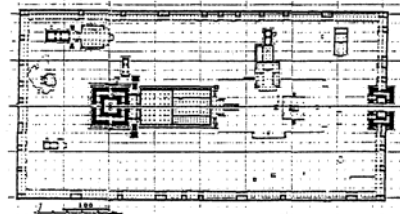


図5. タンジャーグール：プリハディーシュワラ寺

図6. 隋・唐の洛陽城

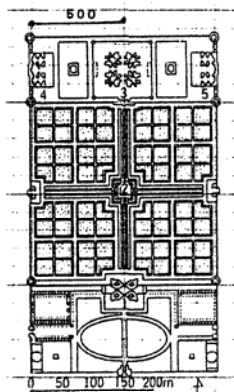
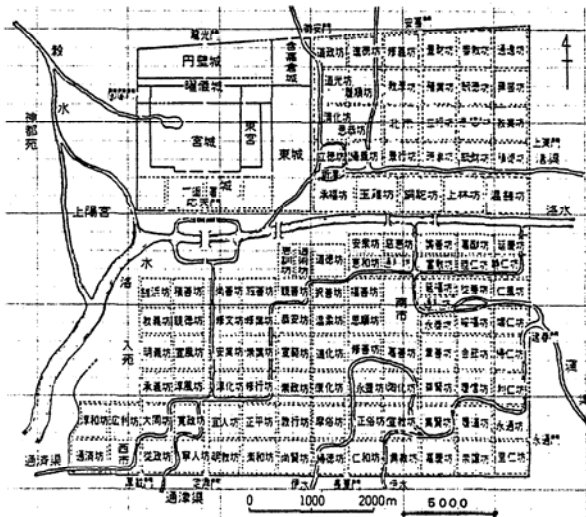


図4. アグラのタージ・マハル